

## 岡村繁先生の思い出

栗山, 雅央  
九州大学大学院人文科学研究院 : 専門研究員

孫, 明君  
清華大学人文学院 : 教授

<https://doi.org/10.15017/1650641>

---

出版情報 : 中国文学論集. 44, pp.61-70, 2015-12-25. 九州大学中国文学会  
バージョン :  
権利関係 :

## 岡村繁先生の思い出

日本の中国学者として、その名が遠く海外にまで轟く者は数多いが、岡村繁先生はまさしくその一人である。

中国の古代文学研究者で先生のご高名を知らぬ者はまずいないだろう。先生の傑出した成果として、二〇〇二年以降、上海古籍出版社より陸統と出版された『岡村繁全集』十巻があるが、中国でこれほどの榮譽を享受した日本の中国学研究者は、今なお他には見ることができない。『岡村繁全集』の出版は、先生の中国での知名度を空前の規模にまで高めたが、一方で先生に対する多くの反論を産み出すことにもなった。多くの中国人研究者が容認し難かったのは、先生の屈原と陶淵明に関する学説である。私も、先生の『陶淵明新論』（原題『陶淵明世俗と超俗』：訳者注）を初めて拝読した際、文章を著して先生と議論したい衝動に駆られたものである。だが、華東師範大学の胡曉明教授による「什么是詩文考証的正路——与岡村繁教授商榷」（『社会科学』二〇〇三年五期）を読み、胡教授の文章が遥かに卑見を超越していたので、岡村先生と論をたたかわせようという思いを断念した。

二〇〇七年三月末、私は九州大学に一年間の招聘外国人教師として赴任した。この大学は岡村先生が一九六六年より二十年あまりにわたり奉職された処である。先生は九州大学を「栄退」してのち久留米大学へと移られたが、九州大学には先生の影響がまだ色濃く残されていた。

九州大学中国文学研究室に足を踏み入れると、壁に掛けられた一メートルばかりの二幅の胸像写真が目に入る。聞けば、その一幅は目加田誠先生であるという。目加田先生もまた日本における高名な中国学者であり、九州大学を退官されたのち早稲田大学へ移られ、早稲田大学の中国文学研究室を開設された。かの松浦友久先生も目加田先生の早稲田大学時代の愛弟子のお一人であった。さて、研究室のもう一幅が岡村繁先生の肖像写真である。写真は

大きくまことに威厳が感じられる。ここで生活する師弟諸君は、毎日この両先達に見守られながら日々の学問研鑽に励んでいるのだ。普段、私は岡村先生のことをこの師弟諸君に折に触れて聞くことができた。岡村繁という、その偉大な名は九州大学中国文学研究室に永遠不朽のものとして刻まれている。

岡村先生は当時すでに齢八十五のご高齢であったので、最近は九州大学に来られることはめつたにないと、研究室の師弟諸君から伺っていた。そのため私は長い間先生のお名前を知りながら、ご尊顔を拝する機会には恵まれずにいた。春が過ぎ夏が訪れ、夏が終わり冬を迎えるも、私は一度として岡村先生にお会いできずにいた。

そのようなある日、葉言材先生が私を熊本への小旅行に連れ出してくれたのだが、帰路の車中で彼はある友人からの一本の電話を受け取ると、興奮しながら私にこう言った。「岡村先生がご用事で福岡市内まで来ておられるので、今から引き返せばきつと岡村先生にお目にかかれるはずだ」と。そうして私たちは大急ぎで福岡まで戻ったが、あいにく時間には間に合わなかった。空もすでに暗く、結局、その日岡村先生にお目にかかることは叶わなかった。

九州大学中国文学研究室では一、二ヶ月に一度、中国文藝座談会という研究会が開催される。ここには九州大学の師弟諸君のほか、近隣の多くの大学関係者なども傍聴者として来場する。私もそこで一度学術報告を行う機会を得た。講演日は十一月十日、私の講演題目は「二陸贈答詩中の東南士族」であった。研究会は午後一時半より開始。私の前に二名の大学院生の研究発表があり、私の発表は三番目に予定されていた。日本の学会発表では、参加者はみなそれぞれに鋭い質問を提出する。たとえ仲のよい友人であっても手心を加えるということはない。若い学部生の質問であっても、ちゃんと答えられなければ、大変ばつが悪い思いをするそうだ。

参加者が着席し、まもなく研究会が始まるかという頃、一人のご老人がそろそろと斜向かいの席に座るのに私は気がついた。その方は周りの人々に目を向けることなく、着席するとゆっくりと礼帽を脱ぎ机の右側に置いた。日本の学会では時折、発表内容に関心のある一般の傍聴者の来場がある。目の前のご老人もおそらくはそのような傍聴者なのだろうと私には感じられた。しかし不思議なことに、静永先生はすぐに立ち上がると彼のもとに挨拶に伺い、さらにほかの先生方も相次いで彼のそばまで来ては同様に挨拶をしているのだ。静永先生が席に戻ってくるのと、小さな声で私にこう教えてくださった。「岡村繁先生です」と。

まさか、その名を轟かせた岡村繁先生が今日この研究会に参加されようとは思ってもよらなかった。のちに知ったのだが、研究室に掛けられた写真は一九八六年に撮影されたもので、すでに二十一年の歳月が経過していた。比べてみると、額縁の中の生氣に満ちあふれた岡村先生と、今、眼の前をゆつくりと静かに歩かれる岡村先生とは、私の中ではなかなか結びつくことがなかった。研究会が終わってから、岡村先生はこの日、私の発表を聴くためにわざわざお越しになったと聞いたが、私はにわかになんか信じていることができなかった。

研究会が始まると、岡村先生は発表を聞きつつレジュメに目を通されていたが、とても真剣で集中したご様子であった。一回目の休憩時間、静永先生が私を岡村先生に紹介してくださいました。私は名刺を差し出したが、先生はすぐに受け取ろうとはせず、しばらくポケットの中を探りご自分の名刺を取り出した上で、ようやく私と名刺を交換された。先生は目を凝らしてじっと私の名刺を眺めておられた。先生は中国語が聞き取れず、わずかに「謝謝」の二文字だけを口にされた。なんとということだろう、中国語が話せずとも、著名な中国学者になることができるのだ。これほど有名な中国学者がよもやこのようであろうとは、私には実に思いもよらないことであった。

互いに自己紹介を終えてから、静永先生の通訳で伺った第一声は、「私は王元化先生の友人です」であった。私には即座にはその意味がわからなかった。先生は私が清華大学に勤めているので、王元化先生が清華園に暮らしていたことに思い至ったためなのか。あるいは、中国の客人に会う時はいつもこのように仰るのか。実は一九八三年九月、岡村繁先生は、当時中国社会科学院学者訪問団の団長であった王元化先生と日本で運命的な出会いを果たしていた。以後二十年あまり、お二人は学問上の交流の中で少しずつ兄弟同然の真摯な友情を築かれ、このことは学界に周知されていた。また、私は似たような話を何度も耳にしてきた。某年某日、岡村先生は上海での国際会議に出席し、華東師範大学から一枚の巨大な扁額を贈られた。先生はこれを空港へと担いできたが、規定の寸法を超過しており、税関職員が通行を許可しなかった。そこで岡村先生は王元化先生を頼るよりほかに、かつて上海市委宣伝部長でもあった王先生は空港へと電話をかけ、その扁額は貴賓通路から直接機内に持ち込まれたそうである。

私はすぐさま自分の研究室から拙著『漢魏文学与政治』を手に取り、岡村先生にお渡ししてご指正を請うた。先生は学生に通訳してもらい、「持ち帰ってゆつくり目を通します」と仰った。初めての対面では、岡村先生の相手に

向けられる態度は極めて真心に溢れ穩やかであり、高慢さや尊大ぶった様子は微塵も感じられなかった。

私の発表は一時間ほどであったが、岡村先生は終始私の発表にじっと耳を傾けてくださった。発表後、私は多くの先生から質問を受け、その回答に追われた。研究会の終了後も、多くの先生方と論文中的の問題について討論した。ようやく私が視線を転じた時には、もう岡村先生はお帰りになっていた。これが私と岡村先生との初対面である。

二度目の対面はその一週間後のことであった。私の同僚である謝思焯教授は唐代文学研究に卓越した成果を挙げているが、この時『白居易詩集校注』が完成し、二〇〇六年七月に中華書局より上梓された。この書物がひとたび世に問われるや、日本の中国文学界にも強烈な反響を呼んだ。そこで二〇〇七年十一月、日本の九州大学と明治大学との合同で、謝思焯教授の日本への学術訪問が実現した。折しも岡村繁先生は『白氏文集』十三巻の訳註整理事業を主導しておられたことから、謝教授の『白居易詩集校注』に並々ならぬ関心を抱いておられた。

謝思焯教授による九州大学での学術講演会は十一月十七日に開かれたが、私が謝先生を伴って会場に入った時には、岡村先生はすでに会場の一列目に座っておられた。先生は立ち上がり謝思焯先生に挨拶を行うと、同時に私を呼び寄せて自分の隣りに座らせてくださった。この会議の中で、岡村先生は通訳を通して、謝思焯先生の校注本を仔細に拝読したこと、謝先生の学問に敬服していること、その他にも謝思焯先生にお伺いしたことがたくさんあるなど、多くを話された。謝思焯先生は謙遜して、「これらのいくつかの典故は私の記憶力が極めて優れていたからではなく、現代のコンピュータ検索で見つけただけのものです」と述べた。すると岡村先生は、「それもとてとても簡単なことではありません。私も『世説新語』は暗誦するほどに読んでいますが、それでもこれほどの典故は思いつきはしません」と仰った。南朝宋の劉義慶による『世説新語』は志人小説であり、漢末魏晋士人に関する逸聞故事が数多く記される。中国人ですら全文の暗誦は容易ではないのに、外国人である岡村先生はなんと全文を諳んじておられるのだ。先生がこうおっしゃったのは、決して知識をひけらかしたのではなく、ただ無意識の内に吐露されたのだろう。おそらく先生は『世説新語』を諳んじておられるのみならず、その学問より察するに、劉勰『文心雕龍』や蕭統『文選』についても同様なのだろうと、私は推測する。

三度目の対面は、翌年三月一日の文藝座談会であった。これは私が日本在職中の最後の座談会であり、月末には

勤務を終え帰国することになっていった。岡村先生がこの時の中国文藝座談会にまさか出席されるとは思いもよらなかった。会が始まる前に、先生は私に『文選の研究』を贈ってくださり、併せて私の文章が非常に素晴らしいと評価してくださった。私はこれは常套句だと思っていた。私自身、論文を拝受したとしても、忙しく仔細に拝読する時間がなければ、その人に会った際には玉稿を送っていただきありがたいとございます、非常に素晴らしかったです云々などと言ってしまふものである。だから、岡村先生がこのように仰った時も、ただ微笑み返しただけであつた。すると、先生は持参したかばんを開け、私の小著を取り出すとご自分のものに置かれた。私が先生に本をお贈りしてから三ヶ月が経過していたが、今日の研究会に参加される際に、わざわざ私の本をお持ちくださったのである。このさりげない出来事は私を驚かせた。岡村先生は表面的な対応ではなく、一人の研究者として私に真摯に向き合ってくれたのだ。この真摯な態度に私は感銘を受けた。この日の座談会もやはり日本語での発表であり、私はいつものように聞き取れなかつた。そこで、研究会の合間に次のような打油詩を詠んだのだが、思いのままに書き散らしたものであつたので、とうとう先生にお渡しできないままでした。今、その詩を披露しようと思う。

贈岡村繁先生

岡村繁先生に贈る

昔聞鴻儒名 今睹先生面

昔聞く鴻儒の名、今睹る先生の面。

謙謙掖後生 同情體古賢

謙謙として後生を掖し、情を同じくして古賢に体す。

淵博大道通 聲名天下傳

淵博として大道に通じ、声名は天下に伝ふ。

聖人難以親 君子幸得見

聖人にて親しむこと難きも、君子幸ひにして見ゆるを得たり。

日本で勤めた一年間、私が岡村先生と対面したのは以上の三度だけであつた。三度とも九州大学中国文藝座談会の席上でのことであり、時間も短く、先生の周りには多くの師弟諸君が集まつており、私と先生とは近くにいた師弟諸君の通訳によつていくらかの簡単な時候の挨拶を交わしただけで、先生から学術的な問題についての教えを請う時間はなかつた。先生に対するより多くの理解は、やはりその著述を閲読して得られたものである。

追悼 岡村 繁先生

岡村繁先生は『文選の研究』のあとがきで次のようにおっしゃっている。

ちかごろ私は、思いがけなく老病相継ぎ、残念ながら私の『文選』研究も、もはやこれ以上推し進めることは困難になったと観念した……。これら私が心血を注いだ論考も、学問の進歩があるかぎり、やがていつの日か、遅かれ早かれ後続の俊秀たちによつて踏み越えられることであろう。これは仕方のない学問の宿命といわねばなるまい。後生畏るべし。『文選』研究のためには、くやしけれども、その日の到来を一日も早からんことを念願することしよう。

先に岡村先生の謝思焯教授に対する讃辞を挙げたが、のちに私は岡村先生が静永健准教授の『白居易諷諭詩の研究』に寄せた序文をも目にする事があった。序文は次のような言葉で始まっていた。

「目からうろこが落ちる」という賛嘆に似た俚諺があるが、この賛辞は、このほど私が本書全篇を読み終えて、そつとページを閉じた時、しみじみと胸中から沸き起こってきた実感であり感動であった。まことに本書は、前途有望な若い研究者がその精魂を傾けた労作であるだけに、しばしば私の冥蒙を啓き、終始私の興感をそそつてやまなかつた、正に近來稀に見る出色の学問的論著であった。……まことに本書は、斬新で示唆に富んだ発想に満ち、論証も多彩にして堅実重厚、著者の学殖と才知を縦横に駆使した出色の労作であった。

更にもう一つ、まもなく日本を離れるという時に、九州大学専門研究員の陳獅君が、私のために饒別の宴席を設けてくれた。その際、話は岡村先生に及び、岡村先生が後進を育てることを最も大事にしておられ、少しでも向上心がある者には言葉を惜しまず激励しておられたとのことを伺った。そして、陳君は岡村先生が彼に送った書簡（本稿末に写真を掲載）を私に見せてくれた。それは毛筆で書かれ、瀟洒で美しい筆跡で、彼の研究が高く評価されていた。この文章を執筆するにあたり、陳君の快諾を得たので、私は岡村先生の手紙の一節をここに披露したい。

まず、昨秋十月『日本中國學會報』第五十九集に御登載の「友の亡妻に代つて詩を賦す白居易」は、関係文献資料を広く搜集、之を極めて有効に活用、且つ日本の研究者も遠く及ばないほど、原文原詩を深く読みこんで、詩人の心情・環境を鋭く把握、卓越した翻訳を以て読者を説得された御才能・御文才・御実力に全く感心いたしました。そして甚大な御教示を得ました。更に拙著『白氏文集三』巻十四の「居人」誤解までも御訂正賜わり厚く御礼申し上げます。

ここから私たちは岡村先生の学問上の懐の深さ、後学に対する寛容と慈愛をはつきりと見て取ることができる。近年、私は東晋文学に関する論文を構想しているが、数日前の雷雨の午後、私は日本から持ち帰った本箱を開け、偶然にも中から岡村先生が二〇〇三年に発表された論文「莊老告退、山水方滋」考―淝水の戦の文化史的意義―を取り出した。拝読すると多く啓発された。私たちは一般的には劉宋時期に出現した山水詩の原因を二つの方面に帰結させる。一つには江南の地の秀美な自然環境であり、二つには老莊思想と仏教思想の影響である。しかし、岡村先生はこれら二方面は根本的な原因ではないとお考えになった。先生の文章は、西晋末から劉宋初期にかけての詩風の推移を分析しておられた。そして、淝水の戦いこそは謝氏一族の無能無策と優柔虚栄とを表したものであると考えられた。ここに至つて、謝氏一族ひいてはすべての士族階層が山水の果てへと向かつたのである。東晋末期には新興軍権が台頭するようになり、劉牢之や劉裕といった最下層勢力がようやく淝水の戦いを契機とした決定的勢力を手に入れたのである。この勢力の興隆が士族階層の政治的軍事的敗北を示唆している。謝靈運の山水文学は、彼の特殊な性格と貴族の特権意識が関係するが、彼が持つ広大清雅な莊園や彼自身の貴族的才学を誇示したいという思いもまた関係する。貴族たちは政治的軍事的優越を失つてのち、ただ文学、特に山水文学に彼らの地位と虚栄とを顕示できたのである。私はその日の日記に次のように書き記した。

今日、岡村先生の論文を拝読し、大変敬服した。彼の文章は、敢えて大胆に定説に疑義を呈した上で、しかも一家の言を成しておられる。文章の構成も巧みで、決して一読して明晰に理解できるような表現方法を取って



敬覆 藤君、日名がいつまでもおくりまが相違分  
の清祥の速勝にて研鑽の興趣、慶賀玉種に存じ上  
り。過報、清華文學の謝思培教授が茶葉、清涼  
の時に、卓越した通訳を長時間して下さりして厚く厚  
く礼申し上げます。お蔭さまで謝先生の清涼も充分  
よく理解できましたし、お蔭さまで質問に對しては懇切な  
お答辯を賜りました。大層嬉しく感激いたしました。  
又去る一月六日には、尚書を函書と共に、最近  
の公刊の卓論文二篇を御惠贈下さいまして厚く礼  
申し上げます。日臘以来、明治書店から刊行中の白氏文

集の社説注の次号校正分を点検するに追われまして  
多忙かつたが、お礼状が非常に通延しました。失礼お済し  
下さい。  
まず、昨秋十月、日本中國學會報の第五十九集の巻載の  
「藤の遺文」の詩を賦詩する白居易一稿、關係文献資料  
を広く搜集、之を秘めて有効に活用、且、日本に研究者は  
遠く及びないが、原文原詩を深く読みこみ、詩人の心情、  
環境を鋭く把握、卓越した通訳を以て読者を誤得する  
人物才能、御実力が全く感心いたしました。そして、  
甚大なお教示を得ました。更に拙著「白氏文集」三巻中

「居人の誤訓」を訂正賜わり厚く礼申し上げます。  
次に「中國文學論集」第廿六号の巻載の「宋代私撰類書  
の収め」白居易逸文考上、終始稀有の詳密な文献考証  
と詳すべく、前掲論文と共に、日中の文学史を研究する  
者には、教養する著作であると感じます。感心いたしました。  
今後益々、お研鑽を重ねられ、お礼お礼を承蒙するに  
さうお願ひ申し上げます。  
尚、貴下、両論文の比べと全と取との足らぬ、拙文でも  
明最速の拙文と同封いたしましたし、お蔭さまで開巻時の  
覧におかれ、お蔭さまで存じます。 茶頌

文安  
二月廿六日  
陳仲學兄 玉章下  
岡村 繁

岡村繁先生書簡（陳仲氏所藏）

ないが、その文章はあたかも山の峰や路が入り組むかのようであり、樹々が鬱蒼と茂り、到る処に龍虎が潜むかのようだ。

岡村繁先生は『詩経』や楚辞から唐代文学にかけてあらゆる分野を詳細に研究されているが、とりわけ六朝文学と古代の文学理論研究の面で卓越した成果を出された。王元化先生は『岡村繁全集』の序文でこう紹介している。

岡村繁先生は一人の影響力のある日本人研究者であり、中国の文化に対しても十分に愛情を持っておられる。私たちは幾度となく顔をつきあわせて議論を交わし、多くの問題に関して共鳴するところがあった。彼が中国文化に対して深く熱い感情を抱くのは、彼が長年にわたって積み重ねてきた中国文化への真摯な研究姿勢から産み出されたものである。

岡村先生も『文選の研究』の中、「この一篇一篇は、いずれも私が、未熟ながらも精魂を傾けて、撫でさすように書きついで懐かしい論文ばかりである」と述べておられる。『文選』の研究に限らず、先生の一生は学問の道に進まれ、その論考は丹精込めて書かれたものであり、論証は堅実かつ重厚で、見解は斬新で獨創性がある。時に私たちは先生の観点に同意し難いこともあるが、しかし、その才学と見識には尊敬の念を抱かずにはおれない。

たとえ同じ山水の景色に向き合ったとしても、樵夫と旅人では異なる見方があるものだ。たとえ同じ人物に対しても、岡村・王両先生が親しく培われた印象と、遠く離れた場所からそのお姿を拝するだけの若輩者の印象とは、おそらく同じものにはならないだろう。王元化先生は序文の中で、岡村先生の「熱情豪放」な性格が強烈な印象を残したと言っておられるが、私のわずか数度の印象では、先生からその豪放な一面を拝見することはいかなわなかった。司馬遷は『史記』巻一百九李將軍列伝の中で、飛將軍李広をこう評している。

余睹るに李將軍は悛悛として鄙人の如く、口は辞を道ふ能はず。……諺に曰く「桃李は言はざるも、下に自ずか

ら蹊を成す」と。此の言小なりと雖も、以て大なるを論ふべきなり。

何故かはわからないが、この三度のごく簡単な対面の中で、私がいざいざ思い浮かべたのは、以外にもこの文言であった。私の眼に映った岡村繁先生は、ごく普通の老人であり、深い山奥から出てきた農夫となら変わるものではなかった。私は先生の気迫に満ちた雄弁を聞くことがなければ、慷慨し激昂した言葉を聞くこともなかった。先生は一人の思いやりにあふれ情の深い年長者であり、ご自分の成果によって生命の価値を証明した著述者であった。曹丕の「典論論文」は次のように記している。

是を以て古の作者、身を翰墨に寄せ、意を篇籍に見はず、良史の辞を仮らず、飛馳の勢に托せず、而るに声名自ずから後に伝ふ。

岡村繁先生はまさしくこのことを体現しておられた。

二〇〇八年七月六日脱稿

(注) この文章は、清華大学人文学院中文系の孫明君教授が、中国の雑誌『文史知識』二〇〇九年第一期に発表されたものを、筆者の許可を得て日本語に翻訳したものである。原題は「岡村繁先生印象」。

孫 明 君

(訳：栗山雅央)